国立国語研究所学術情報リポジトリ

＜講演＞「自由度」こそ日本漢字の魅力

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小駒, 勝美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000899

講演1

「自由度」こそ日本漢字の魅力

小駒 勝美（新潮社校閲部副参事）

ここま・かつみ
新潮社校閲部副参事。日本語を読むための漢字辞典『新潮日本語漢字辞典』（新潮社、2007年）を企画、執筆、編纂した。著書に『漢字は日本語である』（新潮新書、2008年）。

ほかの方がみんな学者の先生でいらっしゃるのに対して、私は出版社の校閲者です。ただ、二〇〇七年に『新潮日本語漢字辞典』を作りまして、今日はその関係でお招きにあずかったのだと思います。

◆出版社での漢字の使い方

出版社の校閲という作業で、著者に問い合わせずに直すことができるのは明らかな「文字の誤り」だけで、あとはすべて鉛筆による「疑問」の形で解決してもらいます。出版社の校閲の仕事は大きく分けて、文字の誤りを直すことと、ストーリー上の前後の矛盾、事実に反する記述など、内容の間違いを直すことです。

先ほど常用漢字が二千百三十六字になったというお話がありましたが、出版社にとっては、常用漢字が何字になっても本当は何の関係もないのです。つまり、どのような字でも使えるからです。

一般向けの本では、著者が書いてくれれば、その字が常用漢字だろうが表外字だろうが、そのまま活字にしてしまいます。もちろん、誤字は直します。著者が「誤字」と書くべきところを「娯字」と書いてきたら、正しく直します。

常用漢字であるか、常用漢字でないか、どこで扱いが違うかというと、常用漢字の場合は常用漢字の字体にし、表外字については正字にすることになります。

嘘 嘘

いきなり「嘘」と「嘘」が出てきますが、「嘘」が正字です。これがどうして正字かは実は微妙な話なのです。正字の基準とされる『康熙字典』には「嘘」が載っているからです（図1）。それにもかかわらず、「嘘」が正字であるとするのは厳密にいえばおかしな話なのです。しかし『康熙字典』の虍部には「虛」ではなくて「虛」が載っているので、これに合わせて、口部の「うそ」も「嘘」を正字としています。ですから、「うそ」は自動的に「嘘」という字を使うということになります。

送り仮名の場合は扱いが異なります。例えば、「すくない」という言葉に「少ない」

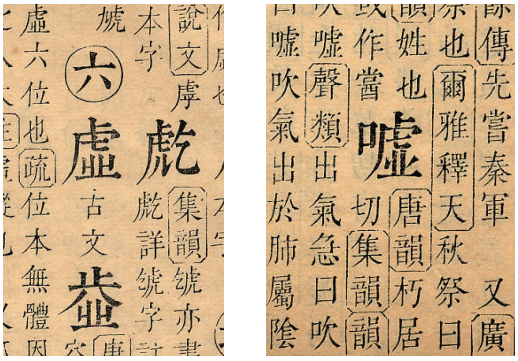

図1『康熙字典』（国立国語研究所蔵本）の「嘘」と「虛」
『康熙字典』の「嘘」はウソ字が入っている？

と送るか、「少い」と送るかというような場合は、著者がどちらを書いてきてもそれでＯＫにしています。送り仮名については、国が決めた「送り仮名の付け方」にはこだわらずに著者の使っているとおりに本にします。

漢字には使い分けがあります。しかし、訓読の使い分けというものは便宜的に定めたものがほとんどです。だから、使い分けの基準に従って漢字を直すということはほとんど行いません。例えば体重を「はかる」というときに計量の「量」を使うのか、計測の「測」を使うのか、あるいは計量の「計」を使うのか。実際に文章を書くときは非常に悩みますが、結論をいえば、どれを使っても構わないのです。

以上の送り仮名、漢字の使い分けでも、例えば「すくない」の場合、「な」を送ったり送らなかったり、それがランダムに出てきているような場合は、どちらかにした方がより良いのではないかというサジェスションを出すこともあります。

それに対して、内容に関する疑問は以前にくらべて非常に増えています。これは、ほとんどの著者がワープロで原稿を書いてくるようになったからです。原稿が手書きで書かれていたときは書きなぐった悪筆の原稿を読むこと自体が重要な問題だったのですが、現在ではどちらかというと内容のほうが校閲の主要な仕事になりました。

例えば、ある作家が書いた小説に、「京都の大文字山から京都の市街にいる知り合いに対して手を振った。そうすると知り合いが気が付いて、『ああ、〇〇さん』と言って手を振り返した」というものがありました。大文字山から京都の市街にいる人が見えるわけがなく、さらにそれを見て、「ああ、〇〇さん」と言って手を振れるわけもないのですが、そう書いてきてしまうわけです。それに対して、仕方がないから疑問を出します。でも、修正のしようがないし、このまま残せばやはりおかしいので、対処には非常に困るわけです。

あるいは「フランクリン・ルーズベルト大統領は子ども時代には女の子のように育てられた」という話が書いてありました。そして、「ルーズベルト大統領の小さいときの写真があります。女の子の服を着せられて、赤いリボンを付けています」という文章がありました。ここに対して疑問が出ます。これはなぜいけないか。ルーズベルト大統領が子どものころは、まだカラー写真はなかったのではないかということです。この疑問を出した人には本当に賞をあげたいぐらいなのですが、こんなことを毎日しています。

◆日本語には正書法がない

昨日私は刑事に脅かされた。

自然に読むと「きのうわたしはけいじにおどかされた」という具合に読めるのですが、これは「さくじつわたくしはでかにおびやかされた」とも読めます。このように日本語はどう読んでもいいのです。すべてがどう読んでもいいわけではないのですが、さまざまな選択肢があります。

また、「サトークンワネコガダイスキダ」という日本語の文は、たとえば以下のように書くことができます。

「佐藤君は猫が大好きだ」
「サトーくんは、ねこが、だい好きだ」
「さとう君は、ネコが大すきだ」

このように日本語には一定した正書法が存在しないのです。

音声としては同一の文章を書くときに、さまざまな書き方が許されているというのは、世界のなかでも極めて珍しいと思います。

◆漢字の数

中国の『中華字海』という漢字辞典には八万五千字が収録されていますが、台湾のサイト上の「異体字字典」には十万字、そして日本の「今昔文字鏡」というソフトには十七万字が収録されています。

漢字の総数は一体いくつあるのか、本当に見当もつかないぐらいです。つまり、コンピュータが進化したために、どんな字でも簡単に画面上に出せるし、印刷もできるようになったのです。活版の時代には文字を作ることは技術的にも費用の面でも大変だったので一定の歯止めがありました。しかし、現在ではその歯止めがなくなってしまったため、過去に一度でも文献に書かれたものはみんな漢字だと考えてしまうことが可能になったのです。

さらにいろいろな人が毎日のように新しい漢字を作ってしまいます。上の写真は椎名誠さんが二十年ぐらい前にお作りになった熟字訓です（図2）。熟字訓が新しいだけではなくて、字が全部新しいのです。全くなかった字を作られました。「鰍鰡」の二字で「かみつきうお」と読みます。これを短編小説のタイトルになさったものですから、やっかいなことになりました。これはJIS第三・第四水準の今の基準でいえば新しいJISが出てきたら入ることになります。

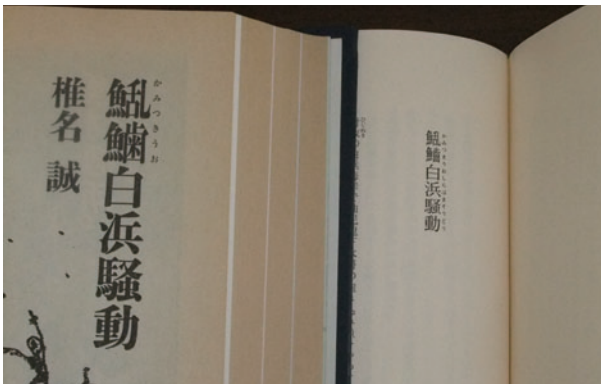

図2 鰍鰡（かみつきうお）
左が初出誌（小説新潮）、右が単行本。2字目の旁が異なっている。

鰍鰡（かみつきうお）

昔、漫画家の白土三平さんが「枾儡鰥潢（いしみつ）」という漫画を描いて、作品のタイトルに全然存在しない字を使って、本を出したのですが、そのおかげで今のJISの第四水準に「枾儡鰥潢」というタイトルを書くための見たことのない創作文字が入っています。そんなことで毎日のように字を増やしていくわけです。

枾儡鰥潢（いしみつ）

い＝枾　し＝儡　み＝鰥　つ＝潢

◆日本漢字の特色

日本の漢字には使用文字自体にも多少の特色があります。中国にない字を若干使っているからです。それを「国字」といいます。一般に、以下のような字が国字といわれています。「鱚」が「きす」で、「鰆」は「わかさぎ」と読むのですが、実はこれは国字ではないとおっしゃる方がおられます。『漢語大字典』という中国の大きな漢字辞典に、この字が全然違

う意味で載っているのです。ですから、日本で作った字ではないのではないかと異議を唱える方がいらっしゃいます。

鱚　鰆

日本独特の異体字として典型的なのが、「第一」、「第二」の「才（だい）」です。これは、中国には全く同じものが今のところ見つかっていないと思います。しかし日本人なら誰でも知っています。なおかつ学校では絶対に教えないものです。しかもこの字は、例えば道路標識にまで載っています。「第二京浜国道」にこの字が書いてあるそうで、この写真がウェブ上で見られます。

才

日本独自の漢字の使い方としては、「弇」が典型的だと思います。これは中国にあるちゃんとした漢字で、「エン」と読み、「覆う」「深い」などの意味があります。小さなマンホールの金属製の蓋のようなものを「ハンドホール」というそうです。これは道路を観察していると沢山あります。東京都が戦後に作った少し古い水道管に附属するものには、「制水弇」と書いてあります。もう少し新しくなると「制水弁」となります。「弇」は「弁」の異体字なのですかね。

「制水弇」と書いたハンドホールは東京都板橋区の我が家の近くに今も残っています（図3）。私が子どものときに、家の庭にこの「制水弇」と書かれたものがありました。長いこと、読み方を知りたかったのですが、誰も教えてくれないし、何を見ても答えが出ていないのです。もちろん中国の辞書にも出ていないし、日本最大の漢和辞典である『大漢和辞典』にも出ていません。

そうしたら、戦前版の平凡社の『大百科事典』の索引の「ベン」のところにこの字が載っていたのです。本文を見たら「ヴァルヴを見よ」と書いてあります。「ヴァルヴ」にこの漢字が当ててあるのです。ですから多分、日本の理科系のヴァルヴなどを扱っている人は当時この字を使っていたのです。「弇」はやはり「ベン」と読むのです。これは恐らく「合わせて使う弁」なのです。そこから作られた字で、実際には国字に近いものなのです。私はこうした字を知るために『新潮日本語漢字辞典』を作りました。

図3 制水弇
板橋区南町22番に現存するハンドホール。
昔の東京都のマークがついている。

弇

他に、身近な日本独特の用法といえば、「町」がそうです。町を「まち」の意味で使っているのは日本だけです。「町」という漢字そのものは中国に昔からあるのですが、「田のあぜ」という意味しかなく、「町」の字はほとんど使われていません。

◆漢字の読み

日本では訓読、熟字訓という特殊な読み方をします。これが日本漢字の一番の肝腎なところです。訓読は日本が発明した方法ではありません。朝鮮半島やベトナムなどでも使っていたらしいのですが、これほど大々的に使ったのは日本人だけです。おかげで漢字の読み方は飛躍的にバリエーションが増えたのです。

「生」は常用漢字表に二種類の音読と十種類の訓読が示されています。しかも、常用音訓以外の使い方も実際には多数あります。「埴生」を「はにゅう」、「生方」を「うぶかた」、「壬生」を「みぶ」と読むのはすべて常用漢字表に出ていない表外音訓です。

字音も三種類あります。たとえば「行」。漢音では「コウ」（行進の「こう」）、呉音では「ギョウ」（行列の「ぎょう」）、そして唐音では「アン」（行脚の「あん」）と三通りで、しかも常用漢字の音訓表にも載っています。日本語ではこんな使い分けをいろいろしています。

さらに、熟字訓はもっと自由度が高い世界です。「今日」を「きょう」、「明日」を「あす、あした」と読むのも熟字訓ですし、「義父」や「亡父」を「ちち」と読むのも熟字訓です。

たとえば、「生命」を「いのち」、「運命」を「さだめ」と読むのは誰でも知っていますが、これは一般の辞典では全く無視されています。

日本語の表記法には、近代化以前のさまざまな要素が残っています。この自由度こそが日本語の漢字の最大の特徴なのです。

こうした日本の漢字を使って、いろいろな形で遊ぶことができるのです。外国の方が日本語で漢字を学ぶには最初のハードルが大変に高いと思うのですが、漢字の世界で遊び始めると、こんなに楽しいものはありません。麻雀に似ていますね。麻雀もなかなかルールを覚えられないけれど、覚えて使えるようになるとこんなに面白いゲームはないのです。

テレビのクイズ番組はほとんど漢字クイズになってしまいました。とにかくどのチャンネルを見ても、漢字クイズ番組と銘打たなければいけないのではないかと思うような番組が極めて多いのです。

漢字が嫌いな方も沢山おられると思いますが、多くの日本人は漢字が大好きなようです。